

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 22 日現在

機関番号：32682

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2014

課題番号：25770243

研究課題名(和文) 幕末・明治初年における士族の動向に関する基礎的研究

研究課題名(英文) Research for the trend in living conditions of the samurai class in the Meiji era.

研究代表者

阿部 裕樹 (Abe, Yuki)

明治大学・公私立大学の部局等・その他

研究者番号：40625266

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、およそ1600家分の鳥取藩士を事例として、彼らの廃藩置県以降の動向について調査を実施した。周知のように、廃藩置県は、彼らの特権階級としての武家の立場を喪失させたためである。彼らの動向は、国家官吏・府県官吏・教員・移民(釧路市・岩見沢市・郡山市等)・その他(実業や神職等)・不明に分類できた。しかし半数以上の藩士については、現状では不明となった。ただし、不明にも意味はあると考えている。というのは、国家官吏・府県官吏・教員・移民・その他に当てはまらないからである。

研究成果の概要(英文)：The Meiji regime was commanding the "Hai-han Chiken" (establishment of prefectural system). Deprived of his its reason for being, the samurai class was phased out. I had to verify whether the life of the samurai class has changed in this matter. I was studied as a case of "Tottori-Han" (Tottori Domain).

研究分野：日本史

キーワード：鳥取藩 士族

1. 研究開始当初の背景

(1) 申請時の明治維新期をめぐる研究状況として、幕末期の政治史研究が深化し、歴史的事実の新発見や新たな知見の発表が続いていたことを指摘できる。研究の深化自体は歓迎すべきことであるが、逆に課題とすべき点もあるように考えた。

まず、近年の研究では、研究・調査の対象となるのは、多くの場合特定の個人や、特定の事象である。結果として、精緻な実証作業の結果が公表され、研究の深化が進んでいる。ただし、例えば、特定個人・事象の分析結果を総体として捉え、広い視野からの研究・分析というのは多くない。近年みられるような特定の人物や事象を深く掘り下げ精緻に実証作業を行うような研究の場合でこそ、大きな視点からみた総括や展望が必要であると考える。

次に、「近代史」研究において、近代化の負の側面についての研究が少ない点である。たしかに、ある事象の先進的な面や、近代化を推進した(あるいは近代化のきっかけとなった)事象や思想について、これを精緻な実証によって明らかにする研究成果は、「近代史」研究の大きな魅力であろう。このことは「近代史」の研究を進めるうえでの基礎であり、指針であるといっていかもしれない。しかし、先進的な面ばかりが「近代史」ではない。大きな時代の転換期にあつて、前時代(具体的には江戸時代)の特質を維持・体現し、新時代に対応できない(対応しない)人物・事象も、「近代史」研究の対象といえる。

例えば、本研究で注目する武士(土族)の場合、土族反乱・土族授産・自由民権(土族民権)運動というようなキーワードでグループニングできる先行研究はあるものの、特に前2者については、文字どおり新時代に対応できない人物・事象の典型といえる。また、たしかに戦後歴史学界では、これらについての先行研究の蓄積も少なくないが、申請時あつては、研究が停滞している印象を持っている。

以上から、筆者(阿部)は、武士(土族)を総体的に捉えるような調査・研究をおこなうことが必要であると考えた。

(2) 薩長土肥に代表される西南雄藩研究が重視されてきた戦後歴史学界において、本研究で対象とする鳥取藩は、藩全体を対象とする研究・藩士個人に注目する研究ともに少ないのが現状である。

重要な先行研究の成果として挙げられるのは、笹部昌利氏による「京よりの政治情勢と藩是決定」(家近良樹編『もうひとつの明治維新』、2006年)等の諸研究や、鳥取市歴史博物館による『移住と移民の歴史展・北海道』(2003年)・『鳥取土族の西南戦争』(2008年)・『因州兵の戊辰戦争』(2011年)等の諸研究である。

また、筆者が所属する明治大学史資料セン

ター(前身時代を含む)では、明治大学創立者のひとりである岸本辰雄が鳥取藩士・旧鳥取藩士族であることから、渡辺隆喜「幕末期鳥取藩の政治情勢と尊攘過激派 岸本辰雄登場の背景」(『明治大学史紀要』第11号、1994年)等の幕末維新期の鳥取藩政についての研究実績がある。

(3) 筆者はこれまでに、「新国隊の動向と岸本辰雄」(明治大学史資料センター『大学史資料センターグループ報告』29集、2008年)、「鳥取藩軍・新国隊をめぐる諸問題」(明治大学史資料センター『大学史資料センター報告』第35集、2013年)などを発表し、また平成23年度科学研究費補助金奨励研究として「地方・新出史料から見る幕末維新期における新国隊の動向と鳥取県西部地域の実情」と題した研究・調査活動を進めた。なお、新国隊とは、幕末期の鳥取藩において尊王攘夷運動の中心的担い手となり、のちに討幕派と位置付けられるグループ(「因幡二十士」等と呼ばれる)が組織・運営した藩軍(農兵隊)である。本研究は、これらの成果を踏まえたものである。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、幕末期から明治時代前半にかけての鳥取藩士・旧鳥取藩士族の動向を、できうる限り悉皆調査し、これを廃藩置県によって断絶しないという意味で廉像的に分析することである。前時代の特権階級である武士(土族)を、特定の個人のみではなく、鳥取藩士・旧鳥取藩士族というグループ(集団)として捉えることで、先進的な面ばかりでなく、その負の側面をも明らかにできるように努めることを目指した。

(2) 鳥取県立博物館には、およそ1600家分の「藩士家譜」が所蔵されている。このサンプル数は、全国的にみても相対的に多いといえる。「藩士家譜」に記されている情報は、彼らの廃藩置県以前の動向である。これらの情報をデータベース化することで、本研究の基礎資料とする。

「藩士家譜」の情報に廃藩置県後の彼らの動向を追加することで(1)の目的を達成する。

また、鳥取藩士をサンプルとしたのは、鳥取藩はのちに藩閥を組織した藩(薩長土肥)ではなく、かつ戊辰戦争の極端な戦敗藩(会津藩等)ではない。したがって、鳥取藩士の動向は、およそ一般的(平均的)なものとして評価できると考えたためである。

3. 研究の方法

(1) 研究の順序はおおよそ以下のように計画した。実績については、後掲(2)(3)でまとめている。

鳥取藩士データベースの作成(廃藩置県以前の情報の取りまとめ)

先行研究の再検討
資料調査・巡見・インタビュー等により、
データベースに廃藩置県以降の動向を追加する
まとめ

(2)平成25年度は鳥取県立博物館等での資料調査の実施、先行研究の整理、関係各地の巡見などをおこなった。資料調査では、鳥取県立博物館「藩士家譜」や「家老日記」の収集を進め、「藩士家譜」については、氏名・石高・家格・幕末維新期に努めた役職などを抽出しデータベース化した。

先行研究の整理では、自治体史ばかりでなく、鳥取県内の図書館に所蔵されている、いわゆる郷土史関係の書籍を調査した。あわせて、鳥取県立博物館や鳥取市歴史博物館のスタッフと連絡をとり、研究成果や資料の所在等の情報の提供を受けることができた。

関係地の巡見では、鳥取県米子市、同日野町、北海道釧路市、同岩見沢市、同足寄町などを訪問した。北海道の諸市町は鳥取県からの大規模移民があった自治体である。釧路市は、その多くが土族移民である。移民たちが開拓したエリアは現在、住宅・商業施設などが多く建っている。また彼らが創建した鳥取神社では、関係資料の調査を実施した。一部ではあるが、子孫のインタビューをおこなうことができた。岩見沢市も、多くが土族移民であった。移民たちが開拓したエリアは現在、都市再開発のため記念碑等以外にその形跡を見出すことはできなかった。

課題となったのは、鳥取県から大量の移民があり、これらの調査・把握が必要となった点である。移民は、江戸時代でいうあらゆる身分(土農工商)にわたっているが、比較的多数の旧鳥取藩士・鳥取県土族が含まれる。

(3)平成26年度は、先行研究の再検討、資料調査実施、関係各地の巡見などを実施したうえで、成果の取りまとめをおこなった。

先行研究の再検討では、特に明治時代の移民に関する諸研究の収集・分析を進めた。特に挙げておきたいものは『鳥取神社百年史』(1994年)と、矢部洋三『安積開墾の展開過程—大久保利通の殖産興業の一事例』(日本経済評論社、2010年)である。両書とも、旧鳥取藩士・鳥取県土族の集団移民についての記録・研究成果であり、本研究を進めるうえで有益な資料である。

関係資料調査・巡見先は、北海道釧路市・岩見沢市・札幌市などである。各地の図書館では、いわゆる郷土史関係の書籍を調査した。

また、新たに埼玉県内在住の岩見沢移民子孫を発見し、移民についての資料調査・記帰路地調査を実施した。

4. 研究成果

(1)鳥取県立所蔵「藩士家譜」をもとに、およそ1600家分の藩士氏名・石高・家

格・幕末維新期に努めた役職などの情報についてデータベースを作成した。これにより、幕末期における鳥取藩士の動向を一覧できるようになった。今後、当該期の鳥取藩政史研究などで本データベースを活用していくこともできる。

(2)(1)のデータベースに、さらに廃藩置県後の動向を追加する作業を実施した。判明した者の経歴は、国家官吏、府県官吏(ただし教員以外)、教員、土族授産としての移民(釧路市、岩見沢市、郡山市等)、その他、不明に分類できた。以下で、代表的な人名を挙げるが、氏名は原則として幕末期のものである。

国家官吏となったのは、藩主・池田慶徳の議定は別格として、河田左久馬(景与、元老院議員 貴族院議員)、河田の実弟である河田精之丞(兵部省・海軍省)、荒尾成章(神祇省)、沖守固(内務省)、北垣国道(京都府知事 北海道庁長官 貴族院議員)、松田道之(内務省 東京府知事)、景山龍造(教部省)、山口謙之進(内務省、大蔵省)、土肥謙蔵(山梨県令 元老院議員)、足立八蔵(正声、新国隊 宮内省)、飯田年平(神祇大録)、奥田義人(文部大臣、中央大総長)らにすぎない。鳥取藩出身者は、藩閥といえるようなグループを形成できなかったこともあり少数である。彼らは、年少である奥田を除いて、幕末維新期の中央政局、戊辰戦争、鳥取藩政にあって顕著な実績があった。奥田については、親族が河田と同グループ(一般に「因幡二十士」等と呼ばれる)である。このグループは、鳥取藩内における尊王攘夷派 討幕派と位置付けられている。

府県官吏としては、作善修造(新国隊 鳥取県・置賜県)、千葉重太郎(鳥取県・北海道)、安達清一郎(岡山県)、本部泰(鳥取県)、伊王野坦(鳥取県)、永見和十郎(新国隊 鳥取県)、加藤助之進(新国隊 鳥取県)、吉岡平之進(新国隊 鳥取県)、大西清太(新国隊 鳥取県)、塩川孝次(新国隊 鳥取県)、芦川源次郎(鳥取県)、山村清崙(鳥取県)、天野祐治(鳥取県 鳥取市長)、山住篤敬(鳥取県)らを挙げるができる。国家官吏と比べれば比較的多数といえる。特徴は、いずれも幕末維新期の鳥取藩にあって、一定の実績があった(=役職を務めていた)こと、鳥取県官吏となった者が圧倒的多数であることを指摘できるだろう。官吏としての在任期間はまちまちであった。

教員としては、岸本辰雄(明治大学創立者)、村岡範為(東大医学部 京大理学部)、伊吹市太郎(米子中学校長・鳥取県官吏)、渋谷金蔵(私塾経営)らを挙げるができる。武士として培った知識・学芸・武芸を活かした転身といえる。国家・府県官吏と同様、いずれも幕末維新期の鳥取藩にあって、一定の実績があった(=役職を務めていた)ことが指摘できる。また、国家官吏・府県官吏と重

複する者も多い。例えば、前記・奥田義人は、中央大学史に名を残す人物でもあり、こちらにカテゴリーしてもいいかもしれない。

集団移民については、『鳥取村五十年誌』（1934年）『岩見沢市史』（1963年）鳥取市歴史博物館『移住と移民の歴史展・北海道』（2003年）矢部洋三『安積開墾の展開過程 大久保利通の殖産興業の一事例』（日本経済評論社、2010年）などの成果を中心に、さらに現地調査で得た資料や聞き取りによる情報を加えたものである。特に、数として多いのが大規模土族移民（集団移民）である。その例として、国府久孝らの釧路市（当時は鳥取村という村落を形成した）移民、吉村織人らの岩見沢市移民、今井鉄太郎（後記）が中心となって結成した「鳥取開墾社」による郡山市（安積）移住を挙げることができる。

また、旧藩主家の池田仲博が経営した北海道池田町の池田農場、根室市への移民、利尻島への移民についても資料調査・巡見を行った。根室市については屯田兵（土族屯田）であった。鳥取県出身者の屯田移民は、北海道東部の根室市などが多かった。当地の巡見や資料調査を行ったが、前記「藩士家譜」が残されている人物には、管見の限り対象者がなかった。池田農場や利尻島については、屯田移民ではなかったが、結果としては、管見の限りであるが同様の結果であった。

その他としては、岡崎平内（自由民権運動 県会議員 鳥取市長等）、土族結社である共立学舎の集った今井鉄太郎（前記・郡山移住の中心人物）、黒部勝次郎、宮崎貞蔵、湯本文彦ら、原六郎（米国留学 実業家）、荒尾恒就（黒住教大教正）、加須屋右馬允（新国隊 名和神社禰宜）、新庄恒蔵（宇倍神社宮司）、二宮禰男（岩井郡許野乃兵主神社神職）、渋谷平蔵（新国隊 実業家）、清水乙允（新国隊 実業家）、松波宏雄（松波隊 衆議院議員）、臼井貞（西南戦争従軍で負傷）を挙げることができる。西南戦争時や土族民権期の共立学舎の動向は、興味深いものであった。前記したように、このなかから今井鉄太郎の「鳥取開墾社」が生まれている。

最後に、現時点（2015年6月）では半数以上の藩士の動向が不明となった。もっとも、不明であることにも意味があると考えている。彼らは、少なくとも官吏になっておらず、移民にも参加していないからである。彼らの圧倒的多数は微禄の下級藩士であり、生計をたてるために生業が必要である。現時点での展望としては、1 - (1) で指摘した、大きな時代の転換期にあつて、前時代（具体的には江戸時代）の特質を維持・体現し、新時代に対応できない（対応しない）グループであったと考えているが、実証作業については今後の課題である。

なお、華族に叙せられたのは、旧藩主家の池田輝知、旧支藩主家の池田徳定・同池田源、前記・河田、同・沖のほか、家老であった荒

尾成裕家・荒尾光就家らである。

(3) 本研究では課題が多く残った。特に廃藩置県後の動向調査については、本研究期間終了後も継続していきたい。

また、成果の公表も今後の課題である。論文等によって成果の公表に努めたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

阿部裕樹「鳥取藩の海防政策と山口虎夫 鳥取藩の西洋流砲術受容をめぐる」、明治大学史資料センター『大学史資料センター報告』第36集、査読無、57 - 101頁、2015年3月

〔学会発表〕(計1件)

阿部裕樹「鳥取藩諸隊・新国隊をめぐる諸問題」招待講演、平成25年11月24日、於鳥取県立博物館（鳥取県鳥取市）

〔図書〕(計1件)

山泉進・村上一博・野尻泰弘・村松玄太・阿部裕樹・他『私学の誕生 明治大学の3人の創業者』、創英社・三省堂書店、2015年3月

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)
なし

〔その他〕

ホームページ等
なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

阿部 裕樹 (ABE, Yuki)
明治大学・総務部総務課・職員
研究者番号：40625266

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし